

研究論文

子ども用怒りの対処尺度の作成

下田 芳幸*¹ ・ 寺坂 明子*² ・ 石津 憲一郎*³ ・ 大月 友*⁴

Developing a child anger coping scale

Yoshiyuki SHIMODA, Akiko TERASAKA, Kenichiro ISHIZU, and Tomu Ohtsuki

【要約】本研究は、子ども用怒りの対処尺度を開発することを目的に行われたものである。小学5、6年生162名（男子78名、女子84名）と中学1から3年生503名（男子248名、女子255名）の合計665名分の質問紙のデータが分析において使用された。探索的因子分析および確認的因子分析を行った結果、7因子構造が妥当であると判断された（問題解決思考、笑いへの転化、肯定的解釈、サポート希求、身体的沈静化、認知的回避および表出抑制）。これらの因子は、良好な内の一貫性（ ω 係数=.73—.88）と良好な再検査信頼性（ r =.57—.77）を示した。そして、基準関連的尺度との相関関係の分析などにより、尺度の妥当性も確認された。学校段階および性別の分析を行った結果、認知的回避を除いたすべての下位尺度について、中学生の方が小学生と比較して、わずかに得点が高かった。また、笑いへの転化については男子の方が女子よりわずかに得点が高かった。その一方で、サポート希求に関しては、女子の方が男子より得点が高かった。

【キーワード】小学生、中学生、怒り、対処、尺度作成

問題 と 目的

令和2年度の暴力行為の発生件数は、小学生が41,056件、中学生が21,293件であり、発生件数の割合も高い状況が続いている（文部科学省、2021）。こういった暴力の背景要因の一つである強すぎる怒りや怒りの表出に対する心理学への期待は大きいと推測される。

こういった怒りや攻撃性に対する心理学的な働きかけとしては、心理面接といった個別支援のほか、予防的観点から心理教育なども実施されている。心理教育に関しては、感情調整スキルの習得といった観点からはソーシャルスキル教育が、心理的ストレスの枠組みから捉える場合にはストレスマネジメント教育が、そして情動としての怒りに焦点を当てた場合にはアンガーマネジメント教育が主に実践される。これらの心理教育において

は、怒りに関する概念教育に加え、良好な対人関係の構築や維持、原因となる出来事の捉え直し、あるいは怒り感情の沈静化のための対処スキルを習得などが実施され、事前事後の得点比較による効果検証が行われることが多い（安達、2013；森田・野中・尾棹・嶋田、2015；下田・寺坂・石津・大月・稲田、2020）。

しかし、心理教育の効果検証に用いる尺度に関しては、課題が指摘されている。例えばソーシャルスキル教育をレビューした安達（2013）は、スキルについて網羅的あるいは正確に測定する必要があるものの、これまで用いられている尺度には偏りがある、あるいは尺度作成の手続きを経ない項目が用いられる点を課題として挙げている。またアンガーマネジメント教育においては攻撃的な行動といった望ましくない行動の減少が指標として用いられることが多く（下田ら、2020）、社会

*¹佐賀大学大学院学校教育学研究科 *²大阪教育大学 *³富山大学 *⁴早稲田大学

的に望ましい対処行動の増加に着目した検証が十分でない点も課題といえる。

より社会的に望ましい怒りの対処に関し、海外で作成された尺度の中では、「コントロール」、「内省」および「抑圧」(Jacobs, Phelps, & Rhors, 1989), 「抑制」および「感情調節的対処」(Zeman, Shipman, & Penza-Clyve, 2001), 「積極的対処」(Furlong, Smith, & Bates, 2002), 「非表出」および「コントロール」(Steele, Legerski, Nelson, & Phipps, 2008), 「注意の向け直し」、「説明と和解」および「ユーモア」(von Salisch & Vogelgesang, 2005), 「肯定的再焦点化」、「再評価」、「計画への焦点化」および「俯瞰」(Garnefski, Rieffe, Jellesma, Terwogt, & Kraaij, 2007), 「気分転換」、「忘却」、「受容」、「ユーモア」、「認知的問題解決」および「再評価」(Cracco, Van Durme, & Braet, 2015)といった下位尺度が該当する。しかしいずれの尺度も怒りの認知面、行動面、感情面の一部を対象としており、各側面を幅広く測定できるとはいいがたい上、日本における適用に際しては、怒りの表出に関する文化差を考慮する必要がある。

一方、国内で作成された尺度に関しては、藤井(2007)や村山ら(2017)が確認できる程度であり、前者では「問題解決型対処行動」、「リラクゼーション型対処行動」と「感情抑制型対処」が、後者では「気晴らし」、「問題解決」と「認知的再評価」が社会的に望ましい対処に該当すると思われる。しかしストレスマネジメント教育やアンガーマネジメント教育では、認知面・行動面・感情面それぞれへの働きかけをねらった包括的プログラムが実施されることが多いことを踏まえると(森田ら, 2015; 下田ら, 2020), これらの尺度で測定できる対処は限定的であるといえ、効果測定に際しても怒りの対処を幅広く測定できることが望ましいと思われる。

さらに先述した心理教育においては、筋弛緩法や呼吸法を始めとする身体的リラクゼーション技法の習得を含む場合が多いもの(安達, 2013; 森田ら, 2015; 下田ら, 2020), 既存の尺度には、こういった身体的リラクゼーションに関する下位

尺度が存在しない。

以上より本研究は、小学校高学年から中学生を対象とし、怒りの対処を幅広く測定する尺度を作成することを目的とする。なお先述した尺度では、友人関係(von Salisch & Vogelgesang, 2005)や学校場面(Furlong et al., 2002)のように、対象や場面を限定しているものもあるが、本研究では心理教育の効果検証として日常場面での全体的な変化を測定することも想定し、対象や場面を限定せず、広く一般的な対処を測定する尺度を作成することとした。

予備調査

項目の収集

先述した先行研究の項目を分類した結果、解決を考える「問題解決思考」(例:そのことをどう解決するか考える), ユーモア的対処である「笑いへの転化」(例:そのことを笑いに変えようとする), 肯定的に評価する「肯定的解釈」(例:いい経験になった, と考えるようにする), 注目しないようにする「認知的回避」(例:別のことに意識を向ける), 感情を抑制する「表出抑制」(例:こころの中でおさえこむ), 状況を受け入れる「許容」(例:仕方がない, と思うようにする), 気持ちを紛らわす「気晴らし行動」(例:お菓子を食べる)に整理された。

次に、上記以外の対処について検討するため、(株)マクロミルに登録している中学生206名を対象に、「怒りの気持ちをなくしたり収めたりするために普段していることの中で、社会的なルール違反にならず他人にも迷惑をかけない方法」について自由記述で回答を求めたところ、952の記述が得られ、34種類に整理された。このうち先述の分類にないと判断されたものが、他者からサポートを得る「サポート希求」(例:だれかと一緒に考える), 出来事の影響度を再解釈する「価値切り下げ」(例:たいしたことじゃない, と考えるようにする), 怒りの直接的な発散である「置換的発散」(例:たたいていいものをたたく), より望ましい行動で発散する「昇華」(例:勉強に打ち込む)で

あった。さらに、リラクゼーション技法に関する「身体的沈静化」(例:呼吸を整える)を加えることも有益と考え、これらについて、先行研究や自由記述の回答を参考に尺度の項目案を作成した。以上の結果、怒りの対処として12種類59項目の試作版が作成された。

方法

(株)マクロミルにモニター登録している103名の中学生を対象に予備調査を行った。「私たちはふだんの生活の中で、いろいろと腹が立ったり、イラっとしたりすることがあります。そのような時、下に書かれていることをどれくらいしますか。当てはまると思う数字を1つずつ選び、○をつけてください。」との教示で、各項目に4件法(0:全くしない, 1:少しだけする, 2:わりとよくする, 3:ほとんどいつもする)で回答を求めた。

結果と考察

各項目の平均値, 標準偏差および歪度を算出し、歪度が1以上および平均値 ± 1 標準偏差の値を参考に床効果または天井効果の可能性を検討したところ、19項目は床効果の程度が著しいと判断されたため、本調査から除外した。以上の結果、暫定版子ども用怒りの対処尺度(Child Anger Coping Scale, 以下, CACS; 40項目, 4件法)が作成された。

本調査

目的

子ども用怒りの対処尺度(CACS)の因子構造および信頼性と妥当性を検討する。

方法

調査対象者 学校長の許可が得られた中部および九州地方の小学校2校の5, 6年生177名(男子80名, 女子92名, 未回答ほか5名), 中学校3校の1—3年生576名(男子290名, 女子284名, 未回答ほか2名)の計753名に調査を依頼した。

使用尺度 調査目的, 協力が任意であること, プライバシーの保護などに関する説明文および学年, 性別¹, 年齢, 出席番号の記入欄からなるフ

ェイスシートと、以下の尺度からなる質問紙を使用した。なお、調査協力校との打ち合わせにより、逆転項目が含まれない尺度にはポジティブな内容のダミー項目を追加したほか、回答者の負担軽減のため、妥当性検討用の尺度の一部は項目を減じた上で学級ごとに異なる組み合わせで実施した。

1. 子ども用怒りの対処尺度(CACS)暫定版: 先述の予備調査を経て作成された40項目を使用した(4件法)。

2. 子ども用怒り感情尺度(武部・岸田・佐藤・高橋・佐藤, 2017): 怒りの感情面を測定するために使用した。なお、本尺度は7項目1因子構造(4件法)であるが、ポジティブな内容のダミー項目3つを追加した。怒りの感情面を測定する本尺度と対処行動を測定するCACSは構成概念が異なること、また、怒り感情と怒り関連行動は必ずしも関連しないことが先行研究で示されているため(例えば寺坂, 2011a, 2011b), CACSとの相関関係は弱いことが予想される。

3. 中学生用攻撃行動尺度(高橋・佐藤・野口・永作・嶋田, 2009): 怒りの攻撃的な行動表出を測定するために使用した。本尺度は身体的攻撃, 言語的攻撃, 関係性攻撃の3下位尺度(各3項目, 5件法²)からなるが、ポジティブな内容のダミー項目3つを追加した。攻撃的行動と向社会的な対処は必ずしも関連しないことが先行研究で示されているため(寺坂, 2011a, 2011b), CACSとの相関関係は弱いことが予想される。

4. 衝動性コントロール尺度(下坂他, 2000): 衝動性のコントロールを測定するために使用した。本尺度は8項目1因子構造(4件法)であるが、回答の負担軽減に関する調査協力校からの依頼により、原尺度の分析結果を参考に5項目を選択して実施した。怒りを対処する際には怒りの衝動性をコントロールする必要があると想定されるため、CACSと正の相関関係が示されると予想される。

5. ソーシャルサポート(細田・田寫, 2009): 周囲からのソーシャルサポートを受ける程度を測定するために、友人からの共行動的サポート(5項目)と情緒的サポート(4項目)を使用した(4

件法²⁾。怒りへ適切に対処すると怒りに起因する友達間のトラブルが少なくなり、その結果、友人との関係も良好に保たれやすくなることが考えられるため、CACSと正の相関関係が示されると予想される。特に、怒りの対処のうちサポート希求に関するものとの相関関係は強いことが想定される。

6. 学校適応感 (大久保, 2005) : 学校への適応感を測定するために、「居心地の良さの感覚」と「被信頼・受容感」の2下位尺度を用いた。なお、回答の負担軽減に関する調査協力校からの依頼により、原尺度の分析結果を参考に各4項目を使用した(4件法²⁾。怒りに対処できると怒りに起因するトラブルが少なくなり、その結果、学校での居心地の良さを感じ周囲と良好な関係を築きやすいと考えられることから、CACSと正の相関関係が示されると予想される。

7. 怒り対処に関する教師評定 : 他者評定の観点からの妥当性検討として、学級担任に評定を依頼した。評定にはCACSの各下位尺度候補の代表的な行動を文章化した記入用紙を用い、よく当てはまる(以下「該当」と表記)、あるいは当てはまらない(以下「非該当」と表記)児童生徒について男女各2名程度を挙げる指名式で行った。なお、プライバシー保護のため、指名には出席番号を用いた。小学校7名、中学校17名の担任に評定を依頼し、順に3名と8名から回答が得られた。

調査時期、調査手続きおよび倫理的配慮 本調査は2019年10月から11月に行われた。調査に先立ち、研究の目的や回答が任意であり、成績評価等と無関係であること、プライバシーは保護され個人が特定されることがないこと、問い合わせ先等をまとめた保護者向け文書を配布した³⁾。その後、学級担任が学級単位で質問紙を配布し、フェイスシートに記載された留意事項を読み上げた後に回答を求めた。質問紙回収後、回答協力へのお礼として竹中・富永(2011)を参考に作成したリラクゼーション技法のプリントを全員に配布した。なお、再検査信頼性を検証するため、調査対象者のうち小学校1校63名と中学校1校93名の児童

生徒には、3週間程度の間をあげ、CACSを同様の手順で再度実施した。

本研究は、佐賀大学大学院学校教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(受付番号19009)。

結果と考察

本研究は帰無仮説検定を有意水準5%で判断した。分析には統計ソフトR4.0.3(R Core Team, 2020)において、psych 2.0.12(Revelle, 2020), lavaan0.6.7(Rosseel, 2012)およびANOVA君4.8.5(井関, 2020)を用いた。

CACSの項目の選定と因子構造の検討 欠席または回答をすべて拒否した53名、回答を途中から拒否したと判断された5名⁴⁾、記入ミスがあった30名を除く665名(小学生;男子78名,女子84名。中学生;男子248名,女子255名)のデータを用いた⁵⁾。

まず各項目の平均値、標準偏差および歪度を算出し、歪度が1以上および平均値±1標準偏差の値を参考値として床効果または天井効果の可能性を検討したところ、天井効果や床効果の程度が著しいと判断された6項目を削除した。

続いて、665名のデータの約6割にあたる405名分のデータをランダムに抽出し、探索的因子分析に用いた。平行分析およびMAP基準から、因子数は5—7因子が妥当と考えられた。続いて、最小二乗法(独立クラスター回転)による探索的因子分析を行い、因子負荷量が.35に満たない項目を削除して分析を繰り返した結果、最終的に7因子27項目が適当と判断された(共通性:.26—.80; Table 1参照)。

第1因子は「そのことをどう解決するか考える」といった4項目からなり「問題解決思考」とした。第2因子は「そのことを笑いに換えようとする」といった4項目からなり「笑いへの転化」とした。第3因子は「いい経験になった、と考えるようにする」といった4項目からなり「肯定的解釈」とした。第4因子は「だれかに一緒にいてもらう」といった4項目からなり「サポート希求」とした。第5因子は「体の力を抜くようにする」といった

Table 1 子ども用怒りの対処尺度の探索的因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	M	SD
問題解決思考 ($\omega=.88$)									
そのことの原因をどうやってなくそうか考える	.88	.03	-.07	.03	-.06	-.01	.02	1.30	0.96
どうしてそうなったか, 原因を考える	.83	-.01	-.04	.06	-.02	-.05	.05	1.57	1.03
そのことをどう解決するか考える	.78	.02	.09	.02	.00	-.05	.06	1.45	1.02
そのことがまた起きないように どうすればいいか考える	.62	-.06	.22	-.04	.12	.00	-.03	1.41	1.02
笑いへの転化 ($\omega=.84$)									
そのことを笑いに変えようとする	-.06	.86	.06	.01	.01	.03	-.01	1.14	0.96
そのことが面白くなるように考える	-.05	.82	-.09	.02	.05	.02	-.02	0.86	1.01
そのできごとの笑えるポイントを探す	-.01	.79	.14	.01	-.04	.01	-.06	0.82	1.03
そのことを笑いのネタにしようとする	.10	.66	-.04	-.04	-.03	.04	.06	0.68	0.97
肯定的解釈 ($\omega=.88$)									
自分のためになることもあった, と 考えるようにする	-.08	-.06	.89	.04	.07	.08	-.07	1.14	0.97
いい経験になった, と考えるようにする	-.02	.06	.84	.03	-.04	-.11	-.01	0.94	1.01
このことで自分は成長できる, と考えるようにする	.27	.10	.60	-.10	-.06	-.01	.01	1.08	1.02
腹がたったできごとを受け入れる	.06	-.02	.37	.04	.04	.14	.16	1.33	1.05
サポート希求 ($\omega=.84$)									
だれかに一緒(いっしょ)にいてもらう	.05	.02	.00	.90	-.05	-.09	-.04	1.35	1.08
だれかといっしょにどうすればいいか考える	.01	-.03	.03	.88	.04	-.07	-.03	1.08	1.08
だれかになぐさめてもらう	-.04	.02	-.03	.55	-.06	.23	.00	0.85	1.01
だれかにイライラした気持ちをきいてもらう	.06	-.01	.02	.44	.07	.12	.12	1.50	1.14
身体的沈静化 ($\omega=.76$)									
体の力を抜くようにする	-.14	-.03	-.02	.16	.71	.05	-.03	1.11	1.01
呼吸(こきゅう)を整える	.03	.05	-.20	-.06	.70	.03	.02	1.28	1.10
深呼吸(しんこきゅう)をする	.08	.02	.02	-.04	.69	.01	.05	1.23	1.12
こころを「無」の状態にする	.07	-.05	.21	-.07	.68	-.01	-.03	1.01	1.07
認知的回避 ($\omega=.82$)									
腹(はら)がたったできごとを考えないようにする	-.03	.01	.09	.02	-.13	.81	-.03	1.44	1.04
腹がたったできごとを思い出さないようにする	.06	-.09	.02	.05	-.01	.75	-.07	1.40	1.04
腹がたったできごとを無視(むし) するようにする	.01	.14	-.09	.12	.12	.45	.09	1.22	1.02
別のことに意識を向ける	-.15	.06	.09	.01	.10	.35	.18	1.71	1.09
表出抑制 ($\omega=.73$)									
とにかくがまんする	-.08	-.01	.03	.05	-.03	-.06	.76	1.51	1.03
こころの中でおさえこむ	-.05	-.03	.13	.00	-.08	.07	.74	1.51	1.05
顔に出ないようにする	.24	.01	-.06	.00	.11	.16	.36	1.46	1.09
因子間相関									
	F2	.44							
	F3	.69	.54						
	F4	.47	.47	.54					
	F5	.40	.44	.37	.42				
	F6	.41	.41	.37	.42	.44			
	F7	.33	.27	.29	.25	.13	.36		

4項目からなり「身体的沈静化」とした。第6因子は「腹がたったできごとを考えないようにする」といった4項目からなり「認知的回避」とした。第7因子は「とにかくがまんする」といった3項目からなり「表出抑制」とした。

次に、残り260名のデータを用いて確認的因子分析を行ったところ、モデル適合度の指標につい

ては、CFA=.918, RMSEA=.052 (90%信頼区間 [.045, .059]), SRMR=.068 と許容できる値を示したことから、7因子構造の想定は適当であると判断した。

本研究では怒りの原因を特定していないため、問題解決に関する行動的因子は含まれなかったが、解決行動につながる「問題解決思考」が得られた

ほか、認知面については他に「笑いへの転化」、「肯定的解釈」、「認知的回避」が得られた。行動面については「サポート希求」、感情面については「身体的沈静化」、「表出抑制」が得られたことから、CACCS は怒りへの対処を幅広く測定可能であると思われる。特に「問題解決思考」、「サポート希求」、「肯定的解釈」および「身体的沈静化」は、心理教育にてよく実施される内容（安達，2013；森田ら，2015；下田ら，2020）と対応しており，効果測定の指標としても有効であると考えられる。

CACCS の信頼性の検討 内的一貫性の指標とされる ω 係数を算出したところ， $\omega=.73-.88$ であったことから，各下位尺度の内的一貫性は概ね良好であると判断した。

再検査信頼性の値は，問題解決思考が $r=.65$ ，笑いへの転化が $r=.69$ ，肯定的解釈が $r=.65$ ，サポート希求が $r=.70$ ，身体的沈静化が $r=.77$ ，認知的回避が $r=.58$ ，表出抑制が $r=.57$ （いずれも $p<.05$ ）であり，いずれも中程度からやや強い値を示したことから，再検査信頼性が確認されたと判断した。

以上より，CACCS は研究での使用に足る信頼性を備えていると考えられる。

CACCS の妥当性の検討 CACCS と妥当性検証用に使った尺度との相関係数をまとめたものを Table 2 に示す。

怒り感情に関しては，CACCS の肯定的解釈との間に弱い有意な負の相関 ($r=-.13$)，サポート希求

との間に弱い有意な正の相関 ($r=.20$) が得られた（いずれも $p<.05$ ）。したがって，全体として CACCS と怒り感情との関連は非常に弱いと考えられ，予測は概ね支持されたといえる。

攻撃行動に関しては，CACCS の問題解決思考および肯定的解釈と身体的攻撃との間，肯定的解釈および表出抑制と言語的攻撃との間，身体的沈静化および表出抑制と関係性攻撃との間に，それぞれ弱い有意な負の相関が得られた ($r=-.13-.19$ ，いずれも $p<.05$)。したがって，全体として CACCS と攻撃行動との関連は弱いと考えられ，予測は概ね支持されたといえる。

衝動性コントロールに関しては，サポート希求以外の CACCS の下位尺度との間に弱い～中程度の有意な正の相関が得られた ($r=.13-.40$ ，いずれも $p<.05$)。よって，衝動性コントロールと CACCS は一定の正の関連があると考えられ，予測は概ね支持されたといえる。

ソーシャルサポートに関しては，CACCS のすべての下位尺度と共行動的サポートおよび情緒的サポートとの間で弱い～中程度の有意な正の相関が得られた ($r=.13-.52$ ，いずれも $p<.05$)。よって，ソーシャルサポートと CACCS は一定の正の関連があると考えられ，予測は概ね支持されたといえる。

学校適応感に関しては，表出抑制を除く CACCS の下位尺度と居心地の良さの感覚および被信頼・受容感との間で弱いから中程度の有意な正の相関

Table 2 子ども用怒りの対処尺度と妥当性検証用尺度の得点間の相関係数

		1	2	3	4	5	6	7
怒り感情 ($n=227$)		.00	-.03	-.13 *	.20 *	-.01	.05	-.03
攻撃行動 ($n=228$)	身体的攻撃	-.16 *	.01	-.18 *	-.08	-.05	-.01	-.08
	言語的攻撃	-.08	.06	-.13 *	.00	-.10	-.03	-.13 *
	関係性攻撃	-.07	-.02	-.13	.08	-.15 *	-.07	-.19 *
衝動性コントロール ($n=223$)		.28 *	.13 *	.40 *	-.01	.24 *	.21 *	.38 *
ソーシャル サポート ($n=364$)	共行動的サポート	.25 *	.24 *	.25 *	.41 *	.24 *	.28 *	.17 *
	情緒的サポート	.25 *	.26 *	.23 *	.52 *	.29 *	.27 *	.13 *
学校適応感 ($n=222$)	居心地の良さの感覚	.13 *	.24 *	.17 *	.28 *	.18 *	.31 *	-.06
	被信頼・受容感	.34 *	.31 *	.34 *	.36 *	.37 *	.42 *	.06

注) * $p<.05$

1=問題解決思考，2=笑いへの転化，3=肯定的解釈，4=サポート希求

5=身体的沈静化，6=認知的回避，7=表出抑制

Table 3 教師評定の該当群と非該当群の項目平均値，標準偏差およびt検定結果

		M	(SD)	t値
問題解決思考	該当群 (n=11)	1.89	(0.82)	3.27 *
	非該当群 (n=9)	0.78	(0.69)	(1.38)
笑いへの転化	該当群 (n=10)	1.48	(1.07)	2.63 *
	非該当群 (n=8)	0.41	(0.64)	(1.12)
肯定的解釈	該当群 (n=17)	1.40	(0.82)	2.34 *
	非該当群 (n=18)	0.78	(0.74)	(0.77)
サポート希求	該当群 (n=12)	1.54	(0.56)	2.23 *
	非該当群 (n=10)	0.98	(0.62)	(0.93)
認知的回避	該当群 (n=9)	2.11	(0.50)	2.66 *
	非該当群 (n=9)	1.14	(0.98)	(1.19)
表出抑制	該当群 (n=10)	1.53	(0.58)	5.22 *
	非該当群 (n=9)	0.36	(0.38)	(2.24)

注) 身体的沈静化は十分な数が得られなかったため除外した。

* $p < .05$

t値下の()は効果量dである。

が得られた ($r = .13 - .42$, いずれも $p < .05$)。よって、学校適応感とCACSは一定の関連があると考えられ、予測は概ね支持されたといえる。

教師評定に関して、該当群と非該当群の各下位尺度の項目平均値と標準偏差をまとめたものをTable 3に示す。

両群を比較するためWelchのt検定を行ったところ、いずれも該当群が非該当群に比べて有意に高く、効果量dも中程度から大きい値を示したことから、両群の差は大きいと考えられる。ただし身体的沈静化は分析に十分な児童生徒数が担任から指名されなかった。怒りを感じたときに体の力を抜くといった対処は周囲から確認しづらいことが考えられ、身体的沈静化に関する妥当性検討には一部課題が残った。

以上より、CACSの妥当性は概ね確認されたと考えられる。

CACSの学校段階別および性別の得点差 最後にCACSの基礎的資料を得るため、小学生と中学生の差異および性差を検討するため、学校段階と性別を要因とする2要因の分散分析を行った。各下位尺度の項目平均値と標準偏差、分散分析結果(F値および効果量 η^2)をまとめた結果をTable 4に示す。

分析の結果、認知的回避を除く全ての下位尺度で学校段階の主効果が有意であり、いずれも中学生が小学生に比べてわずかに高かった(いずれも $p < .05$)。本研究は新たに尺度作成を試みたものであり、項目内容などが異なるため参照できる知見に乏しいが、例えばユーモア的対処(von Salisch & Vogelgesang, 2005)やストレス対処におけるソーシャルサポート(Vierhaus, Lohaus, & Ball, 2007)は年齢が上がると増えるといった先行研究と整合的であるといえるかもしれない。ただし効果量から、発達に伴う上昇の程度はあまり大きくない可能性が考えられる。

性差については、笑いへの転化はやや男子の方が高く($p < .05$)、これは、攻撃的ユーモアは男子の方が高い(朝野・小林・物部・山田, 2012)という結果と類似するものであった。またサポート希求について女子がやや高く($p < .05$)、これは、ソーシャルサポートにおける友人からのサポート(細田・田嶋, 2009)や怒り体験を他者に話す社会的共有(寺坂, 2011b)に関する先行研究と一致している。怒りの対処は、その種類によって、男女で異なる可能性が考えられる。

このような学年差や性別の違いについては、今後さらに検討する必要がある。

Table 4 子ども用怒りの対処尺度の学校段階および性別の項目平均値、標準偏差および分散分析結果

	中学生		小学生		分散分析結果 (<i>F</i> 値・効果量)		
	男子 (<i>n</i> =248)	女子 (<i>n</i> =255)	男子 (<i>n</i> =78)	女子 (<i>n</i> =84)	学校 段階	性別	交互 作用
問題解決思考	1.48 (0.86)	1.51 (0.85)	1.28 (0.90)	1.18 (0.82)	12.08 *	0.22 (.00)	0.69 (.00)
笑いへの転化	1.06 (0.92)	0.78 (0.76)	0.84 (0.85)	0.65 (0.76)	5.29 *	9.51 *	0.45 (.00)
肯定的解釈	1.20 (0.82)	1.16 (0.80)	1.02 (0.83)	0.88 (0.78)	9.76 *	1.35 (.00)	0.42 (.00)
サポート希求	1.01 (0.79)	1.47 (0.86)	0.85 (0.79)	1.21 (0.87)	7.67 *	29.95 *	0.35 (.00)
身体的沈静化	1.26 (0.85)	1.16 (0.86)	1.10 (0.93)	0.90 (0.76)	7.45 *	3.63 (.01)	0.37 (.00)
認知的回避	1.42 (0.80)	1.52 (0.77)	1.45 (0.79)	1.31 (0.78)	1.69 (.00)	0.07 (.00)	2.88 (.00)
表出抑制	1.51 (0.84)	1.56 (0.83)	1.41 (0.89)	1.33 (0.79)	4.75 *	0.06 (.00)	0.79 (.00)

注) * $p < .05$ 平均値下の()は標準偏差, 分散分析結果の*F*値下の()は効果量 η^2 を表す。

今後の課題 怒りや攻撃性は抑うつや不安とも関連する(例えば Kerr & Schneider, 2008)ほか, 中学生の過剰適応研究(例えば石津・安保, 2008)などを踏まえると, 例えば表出抑制が過度であると個人の不全感が増すといったメンタルヘルス面へ悪影響が生じる可能性も考えられる。今後はこういった怒りの対処における基礎的知見の蓄積が必要である。

また, ストレスマネジメント教育やアンガーマネジメント教育における効果研究における活用も今後の課題である。

<脚注>

- 1 トランスジェンダーの児童生徒は, 無回答または回答したい性で回答するといった配慮も可能であることを, 担任に伝えた。
- 2 いずれも本来は5件法であるが, 調査協力校の依頼により他に準じて4件法とした。
- 3 期間内に保護者からの問い合わせ等はなかった。

- 4 学級間の偏りは確認されなかったため, 回答協力の任意性は担保されていたと判断した。
- 5 記入ミスをした児童生徒の学級や項目での偏りは確認されなかったため, ランダムな要因で生じた欠測であり削除しても結果への影響は低いと判断した。

付記

調査にご協力頂きました児童生徒及び教職員の皆様に感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 (18K03099) の助成を受け, 結果の一部は日本心理臨床学会 39 回大会 (2020) で発表された。なお本研究に関し開示すべき利益相反事項はない。

引用文献

安達 知郎 (2013). 子どもを対象としたソーシャルスキル尺度の日本における現状と課題——ソーシャルスキル教育への適用という

- 視点から—— 教育心理学研究, 61(1), 79-94.
- 朝野 聡・小林 優子・物部 博文・山田 浩平 (2012). 中学生のユーモア志向とストレスコーピング 杏林大学研究報告 (教養部門), 29, 39-51.
- Cracco, E., Van Durme, K., & Braet, C. (2015). Validation of the FEEL-KJ: An Instrument to Measure Emotion Regulation Strategies in Children and Adolescents. *PLOS ONE*, 10(9), e0137080.
- 藤井 義久 (2007). 児童版怒り対処尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 リベラル・アーツ, No.1, 71-81.
- Furlong, M. J., Smith, D. C., & Bates, M. P. (2002). Further development of the Multidimensional School Anger Inventory: Construct validation, extension to female adolescents, and preliminary norms. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 20(1), 46-65.
- Garnefski, N., Rieffe, C., Jellesma, F., Terwogt, M. M., & Kraaij, V. (2007). Cognitive emotion regulation strategies and emotional problems in 9-11-year-old children. *European child and adolescent psychiatry*, 16(1), 1-9.
- 細田 絢・田嶋 誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自己への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57(3), 309-323.
- 井関 龍太 (2020). ANOVA 君 Retrieved from <http://riseki.php.xdomain.jp/index.php?ANOVA%E5%90%9B> (2021年12月12日)
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究——個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から—— 教育心理学研究, 57(4), 442-453.
- Jacobs, G., Phelps, M., & Rhors, B. (1989). Assessment of anger expression in children: the pediatric anger expression scale. *Personality and Individual Differences*, 10(1), 59-65.
- Kerr, M, A., & Schneider, B, H. (2008). Anger expression in children and adolescents: A review of the empirical literature. *Clinical Psychology Review*, 28(4), 559-577.
- 文部科学省 (2020). 令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2021年11月11日)
- 森田 典子・野中 俊介・尾棹 万純・嶋田 洋徳 (2015). 児童生徒を対象とした認知行動療法型ストレスマネジメント教育に関する研究動向および今後の展望 早稲田大学臨床心理学研究, 15, 143-153.
- 村山 恭朗・伊藤 大幸・高柳 伸哉・上宮 愛・中島 俊思・片桐 正敏...辻井 正次 (2017). 小学校高学年児童および中学生における情動調節方略と抑うつ・攻撃性との関連 教育心理学研究, 65(1), 64-76.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, 53(3), 307-319.
- R Core Team (2019). *R: A language and environment for statistical computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Rossee, Y. (2012). lavaan: An R Package for Structural Equation Modeling. *Journal of Statistical Software*, 48(2), 1-36.
- Revelle W (2020). *psych: Procedures for Psychological, Psychometric, and Personality Research*. Northwestern University, Evanston, Illinois. R package version 2.0.12.
- Salisch, M. von & Vogelgesang, J. (2005). Anger regulation among friends: Assessment and development from childhood to adolescence. *Journal of Social and Personal Relationships*, 22(6), 837-855.
- Steele, R. G., Legerski, J. P., Nelson, T. D., & Phipps, S. (2008). The Anger Expression Scale for Children: Initial validation among healthy

- children and children with cancer. *Journal of pediatric psychology*, 34(1), 51-62.
- 下田 芳幸・寺坂 明子・石津 憲一郎・大月 友・稲田 尚子 (2020). 小中学生を対象とした学級単位でのアンガーマネジメント教育の研究動向 心理臨床学研究, 38(1), 46-56.
- 下坂 剛・西田 裕紀子・齊藤 誠一・伊藤 崇達・神藤 貴昭・柳原 利佳子...前川 雅子 (2000). 現代青少年の「キレる」ということに関する心理学的研究(1)——キレ行動尺度作成および SCT による記述の分析—— 神戸大学発達科学部研究紀要, 7(2), 665-672.
- 高橋 史・佐藤 寛・野口 美幸・永作 稔・嶋田 洋徳 (2009). 中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 35, 53-66.
- 武部 匡也・岸田 広平・佐藤 美幸・高橋 史・佐藤 寛 (2017). 子ども用怒り感情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 43(1), 169-179.
- 竹中 晃二・富永 良喜 (共編) (2011). 日常生活・災害ストレスマネジメント教育——教師とカウンセラーのためのガイドブック—— サンライフ企画
- 寺坂 明子 (2011a). 子どもにおける怒りの類型化の試み 感情心理学研究, 18(3), 163-172.
- 寺坂 明子 (2011b). 児童期・思春期における怒りの多次元的特徴 発達心理学研究, 22(3), 298-307.
- Vierhaus, M., Lohaus, A., & Ball, J. (2007). Developmental changes in coping: Situational and methodological influences. *Anxiety, stress, and coping*, 20(3), 267-282.
- Zeman, J., Shipman, K., & Penza-Clyve, S. (2001). Development and initial validation of the Children's Sadness Management Scale. *Journal of Nonverbal Behavior*, 25(3), 187-205.

(2022年1月28日 受理)